

京都には、
ケンカを売りに
来ました（笑）。



かたやま・うきょう

片山 右京

イ ン タ ビ ュ ー

日本が誇るレーシングドライバー。
その経歴は、意外と京都に縁が深く。

時に生死の端境を覗く、モータースポーツの世界。その最高峰、F1において日本人第三のレギュラードライバーとして、「世界最速の20数名」のひとりに名を連ねた。折しもラリー出場を控えた日。レーサーとして、登山家として、そして意外にも京都に縁が深いひとりの男に話を聞いた。

「レースをするのには、とてもお金がかかるんです。そのためにメカニックのバイトをしてました。その頃、宇治に住んでたんですよ。レースを始めて2年ぐらい。お金が無くて一番苦労してた頃ですね」。

貧窮した生活だった。人が捨てたオイルを濾して使ったりもした。工事現場のプレハブの一角で、レーシングスーツを着て寝泊まりしていた。月に一度だけ鈴鹿に走り

に行つて、FJ1600のチャンピオンを獲得した。初優勝の賞金の使い道は電気ストーブ。効率の悪い暖房器具だが、それで底冷えの京都の冬をしのいだ。

「だから京都は懐かしい場所ですよ。暗い過去だから（インタビュウなどでは）言つてないけど（笑）」。

一度だけ、社長に「2時間ほどやるから、観に行つてこい」と言われた祇園祭。「竹敷いて、水まいて回るヤツ」を観たことを憶えている。辻回しに目がいくところはさすがである。京都が誇る山鉾も、彼にとっては「大きくて背が高く、コーナリングにいたく手間がかかる車」だったか。

「F1ドライバーになつてから京都に来て、初めて祇園とか、お茶屋さんとか連れて行つてもらつたようになって。だから全然（街使いの底辺と天井の）中間がない（笑）。最近ようやく町家の飲食店とかを知りました」。

現在、しばしば京都を訪れる理由のひとつがBDF（bio diesel fuel）バイオディーゼル燃料である。京都ではバスやゴミ回収車で既に実用化されている。廃油を再利用した燃料だ。その燃料で07年のタカールラリー（正式名称「ウーロミルホーリスボン」ダカールラリー2007）、通称「パリ・ダカールラリー／バリダカ）出場を控えている。

「父の影響で6歳から登山を続けて、一昨年マナスのベースキャンプにいたときにエベレストのベースキャンプの話をして、『たつた50年とか60年で、ベースキャンプが6キロも上にあがつちやっただよ』と。それは地球温暖化のせいなんですわね。以来、環境問題に真つ向から対峙するようになった。

猛スピードの世界を生きてきて、
こんなことを考えるようになった。

「20代、それこそ京都にいた頃、ケガしても立ち上がったのは『絶対見返してやる』とか、そういうモティベーションがあったから。女の子にモテたいとか、有名になりたいとか、お金持ちになりたいとかいう煩惱とかね（笑）。モティベーションって、劣等感とかコンプレックスだったりするから。でも30代、



40代になると価値観も変わる。モノコに住んで、フェラーリやボルシェを何台も持って、それで幸せかという、ほとんど恐怖と疑心暗鬼とかしか感じなくなると、一回はしてみたいけど、できちゃって歳をとると解るんですよ。山に登ったらフィロソフィーも変わるし、色んな物差しが変わる。聖人君子ではないけど、社会貢献とか環境問題とか、ちよつとずつ携わらるようになるんです。きれいな事じゃないけど、自分より人のためっていうね。

車そのもののスピードも、開発も契約も、もの凄いスピードで走り続けたF1の世界。車体・エンジン・タイヤ、全てにギリギリの性能が求められた。ガソリンメーカーも同様、激しい開発競争によってメカニクスが嗅覚を失うほどの極端なガソリンまで現れた。そんな時代を目の当たりにして、片山右京の今はある。

「矛盾するかもしれないけど、僕は色んな人にサポートしてもらってF1まで乗せてもらって、それでご飯を食べて、家族を養って、やってきた。でもレーシングドライバーだけをやるんじゃない、チャリティのように、メッセージを発信できることをやろう、と。折しも京都出身のレサー・松本恵二に廃油を紹介してもらった縁もあった。その企業は伏見区にある「REVO INTERNATIONAL」。その燃料で耐久レースに出るようになり、現在はパリ・ダカールラリーに向けて綿密な打ち合わせを重ねている。出場構想から2年を経て初挑戦となる。

「自動車メーカーに甘えないで、地元

人たちが出した廃油で燃料をつくって、それで、そういうのを応援してくれる企業を募ってやってます」。

ディーゼルかガソリンか、地球か人か。言いたいことが山のように、ある。

世界三大レース。そのひとつに数えられる「ル・マン24時間耐久レース」。片山右京も過去、何度も参戦しているレースである。'06年のチャンピオンマシン・アウディは、史上初めてディーゼルエンジンで勝った車だった。人には優しいが地球に厳しいガソリンエンジンと、逆に地球には優しいが人には厳しいディーゼルエンジンの開発が進む。欧州ではディーゼルエンジンの開発が進む。いずれも開発自体は尊いものだが、いかにせん世界規格がないから国によって法令や開発が異なるのが現状である。京都議定書を世界に発する場となった京都。広義において環境に対する協同歩調を世界に発信した土地として、京都に思うことは何なのか。

「その矛盾は全くその通りで、結構ケンカ売りに来てるんですよ(笑)。京都に限らずなんだけども、『国益とは言わないまでも、利己のためじゃない、公益のためにやろうとやりましょう、CSRじゃなくてやりましょうよ』と。お金をせせばいいって訳じゃない。ロハスだとか何だとか、キャッチコピーはどうだっかっていい。どんな崇高な思想でも、1%の行動の方が意味があるし、意志が大切だから。もちろん自分たちももっと勉強しなきゃいけないし、輪も広げなきゃいけない。その上で『そういう土壌が京都には本にあるんですか?』と聞きたいところがある。以前に僕は住んでいたら、知らなかつた以上に見えてなかつたし、『企業の中で稟議を出してハンコもらって予算が通って』じゃない空気があると思うんですよ、京都には」。

京都議定書に例を探すまでもなく、京都にはそういう地盤があるはずだ。そこをアテにしたいのだと言っ



「バスや清掃車で実績もあるし、京都議定書もあるし、言っている以上、努力は必要。キャピタルシティであつたわけだし、日本を代表する特殊な文化の街だし、外国からの見え方も大きいし、その街には環境問題についてオピニオンリーダーであつて欲しい。厳しい期待感だ」。

「頼むぜ、京都」と思いながら、「走るスポークスマン」が砂漠に行く。

「自らは身をもってパリダカで証明する」というのでないが、世界で初めて廃油を使っ

てパリ・ダカに出ることで、何か根付かせたい。「通信簿はまたもらえらるレベルじゃないかもしれないけど、少なくとも3年とか、5年とかいうスパンで考えていきたいし、『こういうことをやってます』と伝えていきたい」。国の助成より、一般の人たちに浸透させたい。BDFもスタンダードにしたい。試行錯誤もあるだろうが、モータースポーツにも可能性を見せなければならぬ。プロのドライバーたちが日本の基幹産業である自動車に関して進言しなければいけない。伝えたいメッセージは、あまりに多い。

年が明ければ、ダカールラリーが始まる。テレビ報道もされるだろう。砂漠を疾走する片山右京は、京都の天ぶら油を燃料にしているのだ。それを知って観て欲しい。

砂漠の中の過酷な道なき道、ゴールの前に眼前の危機を乗り越えなければ明日はない。見据える視線は自然と厳しいものになる。ゴミ袋の有料化など、一歩一歩前進を見せている京都の環境問題だが、京都人のスタンダードがさらにハイレベルになるように。その鋭い眼光と、同じ鋭い目で京都に目を光らせている「走るスポークスマン」。そんな片山右京が、そこにはいるはずだ。



「ウーロミルホー リスボン〜ダカールラリー2007」

パリ〜ダカール間をおよそ3週間かけて連続し、全走行距離が10000kmを超える「世界一過酷なラリー」として79年に始まったレース。通称「パリダカ」。フランスの正式名称は「ル・ダカール」。近年は欧州各国の都市をスタート地点にしており、'07年はポルトガルのリスボンから、ゴール地点、セネガルのダカールを目指す。本文中にもあるとおり、今回は「Team UKYO」を組織し、競技車両制作を「OSAKA TOYOTA GROUP」が、研究開発を片山右京が客員教授を務める「大京産業大学」が、バイオ燃料を「REVO INTERNATIONAL」がそれぞれ担当し、産学一体で走走を目指す。写真は競技車両の「TOYOTA LAND CRUISER 100」。既にバイオ燃料で去る8月に行われた「アジアクロスカントリーラリー」で完走している。

「UGO CONCEPT BY UKYO KATAYAMA」

レーシングドライバー・登山家・解説者の他に、自転車のロードレースにも参戦しており、自らが開発・販売するロードレーサーブランドも展開中。プロスベックのMTBから、ハイテクノロジーな街乗りを可能にする20インチモデルなど、多数をラインナップ。オンラインのみで販売中。
<http://www.ugo.com/>



片山右京 (かたやま・うきょう)

レーシングドライバー・登山家。1963年東京生まれ。1983年、FJ1600でデビュー。84年、鈴鹿FJ1600Aクラスシリーズチャンピオン獲得。翌年より日本・フランスでF3に参戦。フランスでは「カミカゼ右京」の異名をとる。'88年にF3000に参戦。日本王者となり、'92年より6年間、F1 (FIA フォーミュラ-1世界選手権) に参戦。日本人としては最多の95戦に出場。その後ル・マン24時間耐久レースやGT選手権などに参戦。'01年よりダカールラリーに参戦、'07年はBDFで史上初の出走となる予定。登山家としても知られ、世界的な名峰の数々に登頂。モータースポーツ解説者としても活躍中。

<http://www.team-ukyo.com/>